



金史良作品論 : 初期作品における民衆表象を中心に (二〇二三年度修士論文要旨)

金, 善泰

(Citation)

國文論叢別冊, 2:21-22

(Issue Date)

2024-09-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100491575>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491575>



■二〇二三年度修士論文要旨

金史良作品論

—— 初期作品における民衆表象を中心に ——

金 善泰

本論文は、在日朝鮮人文学の嚆矢と言われる金史良の初期文学について、作者の朝鮮民衆の表象を中心に考察したものである。金史良は一九三九年十月に、日本文壇にデビューした以来、一九四二年の春に朝鮮に帰国するわずか二年間数多い日本語の小説を創作し、朝鮮人作家による「国語」作品として受容される一方で、朝鮮民族の悲痛な運命を描き出したと評価された。

日本文壇に注目された金史良が、日本語を通して文学活動を展開した経緯には、朝鮮民族を描きたいという願望によるものであった。このような観点は、従来の先行論に引き継がれ、金史良文学の民族主義というイデオロギー的な問題関心と、植民地支配における被支配者の文学としてアプローチされた。

しかし、こうした彼の創作は、日本の植民地同化政策の一環である「内鮮一体」に伴われた「朝鮮ブーム」により消費されたことは動かしがたい事実である。つまり、現在における金史良の民族主義というイデオロギー的な観点は、後述的であると言える。むしろ、金史良の作品には、民衆を描き出すことに関する語り手の乖離が可視化されている。

本論文では、このような民衆表象が初期作品にどのように描かれているかに注目し、語り手が描き出す民衆と実際の民衆との距

離について考察することで、金史良と朝鮮の民衆の間の乖離と植民地朝鮮人の苦悩について解明する。

第一章「光の中に」論——植民地の知識人と民衆の連帯意識——は、金史良のデビュー作である「光の中に」(『文藝首都』一九三九年十月)の語り手「私」を中心に、朝鮮の知識人による朝鮮人の労働者との連帯への志向を確認した。

東京帝国大学に在学中である朝鮮人の知識人の「私」は「南」という名前であるが、朝鮮式の読み方の「ナン」ではなく、日本式の読み方の「ミナミ」を名乗っている。「ナン」から「ミナミ」への苗字の変化は、「私」の転向を意味するのである。朝鮮人の知識人の転向は、日本帝国による抑圧という「外的要因」と、自らの意思による「内的要因」があった。「転向論」(『芸術的抵抗と挫折』未来社、一九五九年)で、吉本隆明が知識人の転向は、大衆からの孤立を克服するためであると述べているように、「私」の転向の「内的要因」は大衆との連帯への志向にあった。

しかし、知識人と民衆との連帯は達成できず、自らが内面化している転向が可視化されることは、知識人の内面の矛盾を示す。

第二章「光冥」論——断絶を超えたインターナショナル的な「私」——では、「光の中に」の約一年後に発表された作品である「光冥」(『文学界』一九四一年二月)を取り上げる。

本作には文青年を中心とする朝鮮人労働者と、清水を中心とする朝鮮人の知識人である。彼らが居住する場所は、金史良が東京に滞在していた時期、暮らしていた渋谷区の代々木町である。当時の渋谷区の代々木町では、標高が高い地域は「特別住居地域」と、下町は「普通住居地域」として区分されていた。これによる

と清水と文青年は、それぞれ階級の格差を示す。

階級により区分される二つの共同体は、思想的に民族主義と帝国同化主義という差を見せている。「私」はこの階級の断絶に介入していくのであるが、イデオロギーへの同調は示さず、むしろ距離をおいている。このような「私」の態度は、金史良の「ドイツの愛国文学」(『朝光』一九三九年九月)という評論で、金史良が日本の帝国主義に対抗しつつ、民族意識が権威的になることが偏狭な思想であると指摘した上で、健全な世界主義を志向することを反映している。これを通して金史良の朝鮮民族の内部の葛藤から離れる態度が窺える。

第三章「土城廊」論——封建社会の朝鮮の近代化とニヒリズム——では、金史良の「土城廊」(『文藝首都』一九四〇年二月)における非人稱の語り手の平壤に住む朝鮮人の下層階級の描き方を確認した。鄭百秀「地上の果て、暴力の果て——金史良『土城廊』」(『櫻美林世界文学』二〇〇九年三月)は、本作の登場人物の名前について、語り手が一般名を通して、登場人物たちを呼ぶことに注目し、このような呼び方は人物を一般名でカテゴリー化すると論じる。

しかし、賤民出身である元三と炳吉は、このようなカテゴリーから離れている人物である。これは彼らが語り手の認識の外側に位置することを示す。これにより本作は語り手と朝鮮人の下層階級との間の乖離を可視化するのである。

第四章「ムルオリ島」論——作品の語り手の分裂と朝鮮への意識——では、「ムルオリ島」(『國民文學』一九四二年一月)は朝鮮文壇においてロマンティズムと評価された。

しかし、このようなロマンティズム的な評価は、作品の全体像に注目した分析にすぎない。むしろ、本作には非人稱の語り手と人物の問題が潜んでいる。登場人物の娘が、作者である金史良の分身であるというシン・ヒギョ「金史良の「ムルオリ島」研究」(『国語文学』一九九八年一月)の指摘のように、全知の語り手であるにもかかわらず、登場人物との間の距離が異なるのである。

このような人物の描き方の差は、娘と彌勒に関する叙述において可視化する。作品の冒頭における娘の視点に沿った叙述では、平壤城内から大同江の下流に至る風景を紀行文的なリアリズムで描いているが、作品の後半における彌勒の視点に沿った叙述は、大同江の氾濫する場面において過剰な比喩表現を用いるのである。つまり、語り手は、娘の叙述の場合は彼と同じ視線を持っているが、彌勒は内面焦点化しているにもかかわらず距離をおき、語りが分裂されるのである。こうした分裂は、朝鮮の下層民衆と金史良のブルジョア的な生活の差を示し、日本で生活することで朝鮮と離れた金史良の苦悩が、朝鮮の百姓の生活との乖離として本作の語り手と人物との遠近感により表現されている。

以上の検討を通して、本論文は、金史良の初期作品における日本語の作品の民衆表象から窺える作者の知識人として意識を明らかにした。作品に現れる語り手は、常に民衆の描き方について苦悩するが、結局民衆との乖離は克服できず、挫折してしまうのである。この民衆表象における乖離のゆえに金史良は、一九四五年中国へ脱走し、民衆の革命運動に参加する。本論文はこのような金史良の後期活動を探るための見通しになるのであろう。

(きむ そんて)